

Ⅲ 沖縄関係文献要約レポート

<紹介文献リスト>

- 1. 佐原一哉(1991): 民謡とポップミュージックのはざまにて—バクダット, 沖縄, 大阪, 「思想の科学 第7次」no.141, pp.23~37.
- 2. 真栄田義弘(1971): 沖縄の子どもと教育の機会, 「解放教育」no.4, pp.43~50
- 3. 木村周広(1971): 関西在住沖縄県人子どもと解放教育, 「解放教育」no.4, pp.35~42
- 4. 木村周広(1974): 山口重光君「事件」と沖縄差別, 「解放教育」no.40, pp.27~36
- 5. 宮脇幸夫(1997): 関西における沖縄出身者同郷組織の成立と展開, 「人間科学論集」(大阪府立大) no.28, pp.81-109
- 6. 上江洲 久(1972): 関西在住沖縄県人の生活, 「解放教育」no.15, pp.36~45
- 7. 金城宗和(1997): 本土沖縄人社会の生活世界, 「立命館大学人文科学研究所紀要」no.68, pp.193~229
- 8. 金城宗和(1992): 「エスニック・グループとしての「沖縄人」」, 「関西大学大学院 人間科学」no.37, pp.29~57
- 9. 朝日新聞(1968): 放置される沖縄スラム, 7月15日(朝刊第7面)
- 10. 枝川公一(1994): 大阪の中の「沖縄」は都市の大波に浮く「救命ボート」のごとく, 「潮」vol.423, p362~373
- 11. 服部良一(1999): 30年ぶりのクブンガー, 「差別とたたかう文化」vol.12, pp.29~31

■ 1.

佐原一哉(1991): 民謡とポップミュージックのはざまにて—バクダット, 沖縄, 大阪, 「思想の科学 第7次」vol.141, pp.23~37.

バクダットにて

湾岸戦争勃発一ヵ月半前のイラクでアントニオ猪木の提唱で行われた「平和の祭典」に大阪から河内音頭の民謡集団として、作者は参加した。さてそのコンサートだが、イラクは相当な物不足とインフレで賡済ができない国情ゆえにコンサートの楽器なども十分なものはなく作者はシンセサイザーを持ち込んだ。そのときにイラク地元のバンドからエレキピアノを借りる代わりにそのシンセサイザーを貸すということになった。さて、作者らの演奏が好意を持って受け入れられたその後に、その地元バンドが演奏した。構成はロックバンドに近いもので、お世辞にもうまいといえるものではなかったが、アラブ調のメロディは魅力的ではあった。アラブの音楽は、日本の民謡や演歌と似て細かいコブシを多用しニューアン

スをつける。さて、そのアラブの地元バンドのキーボーディストはそのニュアンスを出すために、作者のシンセサイザーについているベンダー（キーボードについてくる操作棒のようなものでピブラートをつけたり、音程を微妙に変えたりできる）を多用していた。そして、左手でベンダー操作、右手でメロディを弾くプレイをかなり激しく続けたあげく、ついにベンダーを故障させてしまった。

通常のキーボードのベンダースイッチはあまり多用することがない。というのも12音階の音程以外を使用することは現在の欧米日の音楽では少ないし、その必要がないからである。しかしアジア、アラブ中近東、アフリカなどの音楽は12音階の間にある微妙な音程や、独特のピブラートを取り入れることで味わいの深さを見出すのが特徴で、その感じを出すために彼はベンダーを必要以上に多用したのだった。しかし、自分なりにアラブロックにあう弾き方を見せてくれたのは、とても新鮮だった。

われわれ現代の日本人の場合、新しい電気商品などを買うと使う前にマニュアルを読み、そのとおりの使い方を試しやと使いこなせるようになる。そしてマスターした時分にはもうすでに新しい商品が出てくるというたちこっこの繰り返しを強いられている。気が付いたときには機械に使われていて、機械に接しようとしても受動的にならざるを得ない。人間が使う道具としての機械という主従関係をすっかり忘れてしまっている。

アラーの神に、よりちかく

作者がイラクに行った一ヵ月半後、平和の祭典むなしく湾岸戦争が勃発した。爆弾から逃れるために防空壕に避難する市民の姿が映し出されていた。コンクリート打ちっぱなしの地下壕の中でバクダッドの人々は、老いも若きも男も女も一緒に手拍子を打ち鳴らしながら「莫大なるアラー」と繰り返し歌い叫んでいた。歌い叫ぶことで戦争の不安を打ち消そうとしていたのだが、作者にはかわいそうな同情的な光景というより何か崇高な宗教儀式の現場を覗いたような気分だった。彼らは純粋な気持ちでアラーの名を呼んだに違いない。彼らはコミュニケーションを高めあいながら、ほかのどんな人よりもアラーに近づいたのだらう。

それに対してある種のうらやましさを感じたが、それは僕ら日本人の間には影が薄くなってしまったコミュニケーションの媒体としての音楽の存在がまだバクダッドには残っていたからだろう。もし仮に日本が戦時下に入り、バクダッドのイラク市民同様防空壕に押し込められたらわれわれは何をするだろう？お互いのコミュニケーションの道具として言葉以外のものがあるだろうか。もう、老若男女がいっしょに歌える歌など存在してないのではないだろうか。あるものはワープロやパソコンを持ち込んで仕事をし、あるものは雑誌や漫画を読み、あるものは携帯電話で遠くの友人と会話しているのだらう。そしていくつかの家庭の間を取り持つのはテレビに決まっている。

作者が沖縄の小さな民謡スナック（沖縄ではこういうのが多い）に入ってみると一人の初老の男がいた。彼はカウンターで一人三味線を弾きながらぶつぶつと最近できた新曲だといって、誰に向かっていうわけでもなく島唄（沖縄独特な歌のこと）のメロディを口ずさみ始めた。その人はまったくの素人だったのだらう。しかし、素人の人が自分のために自分の新曲を作って歌うことがあたりまえかのような現実が非常に驚きであった。彼は多分、だれに聞かせるというよりは自分に歌い聞かせる、自分が歌いたいから歌っ

ただけに違いない。

あたりまえだが歌というものは自分のために歌うのが本当の原点であるのに、自分のために歌っていると感ぜられる歌がどんなに少ないことか。確かに自分が歌いたいという気持ちがある気持ちに勝っているだろうと思われる歌手もたくさんいる。しかし、その姿勢さえもなぜかナルシスティックに見えたり、ウソっぽく見えたりするのはなぜだろうか。日本の歌い手で本当に魅力的な人が少なくなったなあとと思うが、この辺にも原因があるのではないだろうか。

通常、鳥唄クラブでの生演奏は、縫ったりした曲が数々演唱され、最後にテンポの速いわばダンスナンバーになる。その瞬間に人々が川の水が流れ出すように踊りだすのである。そして自分の好きなだけ踊ると、演奏が続いていようが終わろうが、またもとの席に戻ってしまう。踊りの止め方まで自然である。本土では決してそうはいかない。まず踊りだすときに「人の目を気にする」か「誰かを無理やり誘う」。そして自然に踊りだしたと思うとその人は「単に酔っ払っている」。また踊っていても「歌い手を見つめたままで自分本位に楽しめない」。そして最後は「なかなか踊りださなくせにいったん踊りだしたら唄が終わるまで自分から止めようとしなさい」。すべての沖縄の人が持っているものではないが、人間感情が素直に唄や踊りに結びついている自然さはただうらやましい限りである。

関西にて

関西で音頭といえば河内音頭や江州音頭である。音頭は七月後半から八月にかけての関西一円の盆踊りで生演奏される。さて、そうした盆踊りを見ていて常々興味深いのは、踊り子さんたちの踊りのリズム感である。PA（自分側に音を送るためのスピーカ）がうまくいかず十分な楽器の音が聞こえていないことが多い。さぞかし踊りにくいだろうと思っていたが、踊り子さんたちはそう苦にもしていないことがだんだんわかってきた。もちろん楽器が聞こえるに越したことはないが、なければならぬ歌だけを聴いて踊れるようなのだ。

それは音頭のコブシにリズムを感じているのだろう。それはこぶしのリズムとっていい。盆踊りはひとつの楽器がリズムの核をなしているのではなく、全体を揺るがすひとつのビート間を演奏者と踊り手の両方が感じ取りながら作り出しているように思える。優れた音頭の伴奏者は、よく音頭取りの口の動きを見ながら演奏する。踊り子は、踊りの輪の中心である音頭取りと等間隔の位置で、常に唄を意識しながら円を描いている。つまり音頭取りは踊り子の足を見ながら踊りのノリを感じながら歌う。そしてそのようなことができるのはお互いのその場の息によって微妙なリズム感を感じ取れる繊細さを、持ち合わせているとっていい。つまり「沈黙の音を聞く」ことによって音楽を聴いているということだろうか。しかしこのごろの日本人はヒップポップや、ダンスミュージックなどのコンピュータ等を使った規則正しいビートに支配され、日本人のリズム感は微妙な揺れから規則正しい機械的なものへと、変化してしまったのだろうか。

五感としての音楽

野球の優勝祝賀パーティーでのビールかけ。子供のようにはしゃぎまくる選手を見てると、われわれの生活にああいう場が本当に少なくなったなあとと思う。テレビで見える限りでは選手のかけ声と拍手と興奮した顔が流れてくるだけだが、現場では、ビールのおい、ぬれたユニフォーム、報道陣のまばゆいばか

りのフラッシュなど五感を刺激されることによっていっそう興奮の度合いが増す。五感を動員することによってお互い高いレベルでコミュニケーションを図ることができるのではないだろうか。音楽の聴き方も本来は五感を常に伴っていたはずで、だからこそ音楽は人間のコミュニケーションを取り持つ最高の媒体として存在していたのである。

戦後沖縄で禁止された「毛遊び」という遊びは、野原や浜辺で若い男女が夜集まって好きなだけ歌い踊る集まりであるが、これこそもう最大限に人間の五感を総動員したコミュニケーションの場である。潮のにおいや泡盛の下ざわり、満天の星に異性の肌触りをじかに感じながら島唄を歌い踊るわけである。これに比べ今の日本は、年一度にやるプロ野球団のやるちゃちなおあそびをテレビの前で指をくわえてみているだけというとてもお寒い状況である。

都市化文明化に反比例して人間同士のコミュニケーションが希薄になっていく過程で音楽の聴き方がより密室的、個人的になっていくのは逃れようのないものだろう。しかし、いくら機械的に個人レベルで五感を刺激するシステムが実現しようが人間同士のコミュニケーションの崩壊は避けられないのも事実である。

(足立文英)

■ 2.

真栄田義弘(1971): 沖縄の子どもと教育の機会、「解放教育」no.4, pp.43~50

この小論文は沖縄の人々が、如何に本土の人々にかかるべき負荷を押し付けられ、その上本土の人々なら当たり前に享受出来る権利を奪われてきたかについて述べ、そこから一步踏み込んで、行政のこれまでの対応の遅れを糾弾している。データは60年代がメインである。

順を追って行くと、沖縄差別が、水平社が戦う部落差別と裏表のような関係にある点に端を発する。江戸時代、近代、戦後、一貫して沖縄は差別されてきている。抑圧・差別にたえずさらされ、戦時中または戦後において犠牲の槍玉へと筆頭で上げられた。

アメリカに占領されていた間、教育権に国家的後ろ盾がなく、当り前の権利が保証されていなかった。加えて、教育施設が戦火によって焼けていたため、教育に関する統計を見ると本土と比較して2~3割下回る結果となっている。

本土に移転した沖縄出身者に関しても同様に厳しい状況であった。

戦争で肉親を失い、家、職を失い、残る土地も軍に接収されて、どうにかしてつてを頼って本土に移転した訳だが、一切の保証を受けられず、生きるだけで精一杯だったのである。その影響は間違いなく教育にも出ている。

転校が多くなる。不良住宅に近い長屋での生活。不安定な生活による就学意欲、余地の低下。

また、沖縄で中学・高校を卒業すると同時、もしくは数年後に本土に進学をかねての集団就職というケースが年五、六千人から、一万人近くにのぼる。このケースが起こり得る事自体が、教育の機会均等の原則に反する事であり、更にこの教育への意欲を食物にする輩までいたのである。

集団就職兼進学のパンフレットには、一流の高校と表記し、それらしい写真等を掲載して呼び込んでお

き、実態は企業内に設けられたプレハブ校舎で、兼業の教師からおさなりに授業を受ける程度の代物である。それに対して抗議しても適当にあしらわれるか、パスポートを会社が返さないかのどちらかで、完全な詐欺としか言いようがない。

そうなってしまった原因は、日本が沖縄を酷使し、虚げ、見捨てたからにはほかならないからであり、その憤いや対応が遅れている事も問題である。

このようにして沖縄の子ども達の教育機会を奪い、沖縄を基地の島にしたままで日本が民主化を進めて行った過程に対し、この論文は鋭い批判を行っている。

(竹下善博)

■ 3.

木村周広(1971): 関西在住沖縄県人子どもと解放教育「解放教育」no.4, pp.35~42

関西在住の沖縄県出身者の小学生と中学生の勉強環境や上級学校への進学率などから、沖縄出身の子供達の教育環境を考察している文献である。約30年も前の文献であり、現実性は少し劣るかもしれないが、当時の沖縄県人の子供の教育状況を理解するには役に立つと思うので、次に文献の概略を紹介してみたい。

沖縄の子供の場合、生活、若い指導者、親の子供も進路に対する展望、子供の主体性などが教育の課題となることは間違いないさそうであるが、その背景である環境、親の職業、教育に寄せる関心について観察してみよう。

近畿地方在住の沖縄県人は、約6万人と推定されている。集団就職や軍労務、農業などの離職者の移住が急激に増えてきた。小学生1万3千人、中学生6千5百人と推定される。その居住地区は大阪と兵庫が中心で、中でも大正区、西成区、此花区、尼崎の長洲、戸ノ内、宝塚市の高松などの工業地帯に集中している。地区によっては広域に散在している所もあるが、一ヶ所に密集して「沖縄部落」を形成している所もある。それらの地区のなかには、土地区画整理されてやや近代的な様相をしてきた所もあるが、まだまだ騒音とスモッグにおおわれ、満足な排水溝さえない低湿地帯の狭い地域に薄くらい家がひしめいて建てこんでいる。経済的に幾分余裕ができ、電気製品も幾つか揃い、住居の手直し、時には新築もできたであろうが、粗末な簡易アパート、老朽化した棟長屋が多い。

住居内は雑然としていることが多く、冷蔵庫やテレビがバランスの取れない広い場所を占拠している間を、幼児たちが跳んだりわたりしている。テレビがどどこか入っているかたわらに机を与えられたのでは、読書や計算に注意力が集中するわけがない。記憶や暗記で間に合う小学校ならともかく、公理、定理を応用して熟考しなければならない段階の中学、高校生が、いくら能力があってもこの条件下で能力をのばせるはずがない。

職業は工員が最も多く、運転手、大工、建設業、失対か、貸家業(簡易アパートが多い)。鉄工業、運送業、古物商、会社の下請けなどの経営か、その従業員である。これは出稼ぎの性格がはっきりしている。家庭の主婦として、本格的生業、内職、パートタイム勤務をしている人が多く、ほとんどの家庭は昼間訪問しても誰もいないのが普通だし、「おばあさんに至るまで内職で働かないものはいない」という報告もあ

る。

教育に対する関心は、端的に言って非常に強い。教育や学歴の無いものは安定した職業、生活を望めず、いかに悲惨であるかを肌にも刻み込まれた人達であるから、食わずとも教育。学問を受け、学歴を持たなければと怨念めいたものさへ感ずる。教育とは何かの真髓にまでは達しなくとも、学問、学歴には親の仇くらの執念がある。したがって子供に「勉強せー」「勉強せー」は口やかましいし、通知簿の評価を気にすることもひととおりではない。

子供は家が狭いから道路のそここで遊んでいる。野球などやると団結が強く、非行率も低くはないが、子供達には車庫やひげめは全然見られない。組織すると頼もしいと思う。複雑な家庭や低所得者も多いので学費補助者も相当いる。親は学校にたいしては『御上』のものという絶対信頼感のようなものがあって、『先生お願いします』式の先生任せが多い。家庭は冷蔵庫やテレビは揃っているが、机の前には漫画の本ばかりで、何を揃えてやって良いのか勉強の手立てがない。家庭でどうすると言うところまではおよばない。学期途中の転出入も割合多く、平均して学力が劣り、沖縄から来てすぐは落差があって気後れることは確かで、特殊学級（知能指数が低い、性格が弱い、環境順応が遅い子供を編成）に必ず1、2名はいる。

不在家庭の教育的関心は「子供と学校の出来事についてよく話す」が40%、「ときどき話す」が53%と高く、授業参観は「よく行く」が40%、「ときどき行く」は43%と強い関心はあっても、仕事の関係上、学校の行事日程に合わせ得ない悩みが読みとれ、学習成績も「気になる」が72%と高い。子供の成績が向上することは、実は自分達の生活の動きにもなり、将来をとおして、生活設計とか、あるべき未来の姿を想像する心のかてともなり得るであろう。

B小学校の状況を見ると、いわゆる非行児は、最近沖縄っ子には見られない。学業成績は上位と下位に大別されるが怠業はない。クラス委員、児童会役員にも選出され、陸上、音楽発表会のメンバーは20%以上を占めている。性格として沖縄意識とは無関係に、底抜けに明るく、現代っ子らしくのびのびとしている。在籍は全校の13%でありながら、準要保護児童数のうち18%と、沖縄の子供で高率を示しているのは、生活程度が低いこともあるが、権利意識に立つてのこともあるので卑屈なことは少しもない。親の教育観は、広い展望に立脚しての考えは無理で、あくまで現実的である。学歴の高い親は大学説、学歴の低い苦勞人は金力説が有力である。

沖縄地区に対する見解は、表現に差異はあっても質と量において同じ状況が一致している。途中転出入の多いのは、経済的な面ばかりではなく、本土の学校に対する夢、希望、期待の現われでもある。半強制的に親に連れてくるのも、設備が整った教材の揃った本土の学校には入っただけで、自分が受けられなかった幸せな教育を子供に受けさせることができた親は満足するのである。だから「先生任せ」にもなるわけである。社会福祉に携わる沖縄の先輩が「稼いで遊ぶばかりが能ではない。自分が働いているところの定住して地域社会のために滲透して根を下すことこそ、子供のためであり、後輩のためだ」といわれたことをいまさらの様に痛感するのである。

沖縄県子弟は、進学率が全校比に劣り、一般生徒比率とはさらに開きが大きい。ことに公立進学者の低率には驚く。優秀な者もいないではないが、Y校では公立39人中65%は入りやすい工業高校である。さらにY校70人中女子はただの25人で、卒業生の沖縄女子45人の55%という低率である。全国進学平均率90%に近い今日、この数字をどう読解すればよいか。「女性は学校行く必要がない」「女が学

問をすると思気になって家庭生活に向かない」と言う古い思想か。家庭内のすべてのしわ寄せが女の子の犠牲において解消される。兄弟が多いから早く親を助けて、兄が、弟が進学するから、お前はあきらめてくれというのだろう。経済的に身入りもいづらか良くなり、社会的認識や教育観も高まっているはずなのに、未だこの段階でしかなかった。進路の本人任せも、聞こえはよいが親に指導性や展望が無いことの表明である。家庭でどうするかと言うところまではいっていないことがここにもある。それでも、大変良くなったと一昔前の状態を念頭に置いた尺度で、現在に一種の満足を得ているのが沖縄出身の労働者である。進学率と裏腹に就職率の高いことは当然である。就職率の高い中学校区には、必ず沖縄県人の居住地がある。

以上見てきたように、1971年当時、沖縄県人の子供達の教育状況を評者なりにまとめてみると、住居環境からは勉学の環境が整えなく、親も子供の教育に対する関心は高いものの、生計の都合などで現実的な教育観を持ち、家庭でどうするかというところまでは及ばなく、「先生任せ」であった。このような状況で沖縄県人の子供は一般の子供より進学率は低くなり、就職率が高かった。特に女の子の場合はこういった傾向が著しかった。これはあくまでも30年も前の状況であって、今は昔とは違う教育状況であろう。

(金 尚奎)

■ 4.

木村周広(1974): 山口重光君「事件」と沖縄差別「解放教育」no.40, pp.27~36.

山口重光君「事件」

山口重光君、沖縄県出身、昭和43年に沖縄から職を求めて大阪に来了。しかし、大阪では、沖縄人に対する差別意識は強く、最初の職は給料が安く、しかもきつい仕事を与えられた。また、職場には彼に対し「荒っぽい口のきき方されることは多かった。」という理由で仕事は止めたが、しかし、職はいくつかを就いていても、沖縄への差別は変わることはなかった。元社長との相談に乗ったところ、社長が「示していた好意的な態度はたんに見せかけにすぎない」と思い込んだ彼は社長宅での放火を起こし、社長夫人が焼死ということに至った。

この事件に対して、大阪地裁は、山口君には殺人意識がまったくなかったにもかかわらず、なお、沖縄出身者への差別の存在という事実を考慮せずに放火、殺人という罪で懲役10年の判決を下した。

この事件をきっかけで、本土で就職している沖縄人の間の大きな怒りをひきおこし、また、本土で生活する沖縄人への差別問題は社会的な関心を高めた。

集団就職の背景と現実

山口君事件の背後には実は沖縄人の集団的に本土で就職するという背景がある。沖縄県は経済的には全国にくらべ、後発であるため、学校を離れた青年たちは職をもとめようとしても、仕事に就かないのは現実であった。従って、本土での就職はせざるをえない彼らは本土での集団就職に出かけた。昭和32年以後集団就職に出る沖縄人は増え続けていた。

ぎ労働者の居住地域が相次いで形成され、1920年代から1930年代にかけて次第に出稼ぎ型から非選流定着型へと変化していった。沖縄出身者の集団は朝鮮人労働者の集団と同様に雇用や住居において差別された。その為、同郷者を核としたネットワークを形成し共同体規範を保持した集住地区が形成されてゆく。

沖縄から大阪に

沖縄出身者がいつ頃から出稼ぎに来るようになったかは曖昧であるが、明治後半から沖縄～大阪間の物流が増加し不定期ながら那覇～大阪間の貨客船が月に何度か行き来することになる。1884年に月1便で始まり、1911年には月10便まで増加している。

決定的な増加を見せるのは1920年代である。原因は、第一次大戦の終結によって黒糖の価格が暴落し、台湾の製糖業に吸収されてしまい農村の過剰人口が本土に流入しだしたことによるものだ。主として10代や20代の若年層を中心として出稼ぎが始まった。主要な目的地は、伝統的な商業・金融の中心地であり、紡績工業・機械工業などの工場地帯も有する大阪であった。沖縄出身の労働者は、男性は主に土木建築や雑業に従事する日雇い労働、女性は紡績業へと吸収されていった。その過程で工業地帯周辺に沖縄村と呼ばれる集住地域が形成されていったのである。

郷友会と県人会

当時の沖縄出身者のコミュニティは、二つの相異なる組織原理に基づいた集団により組織化されようとしていた。ひとつは、言語や振る舞いなどの日常的な習慣を基盤にした「同郷性」によって結びついた多くの同郷会組織。そしてもうひとつは、目的意識的な判断に基づき自覚的に組織された集団である関西沖縄県人会である。

1920年代の集住地域は、沖縄の農村地域から単身で出稼ぎに来た若い男性労働者の居住地域であった。彼らは同郷者をたよりに、押しかけの住み込みから始め、同郷人のネットワークを介して職を求めていった。同郷会組織は、こうした日々の生活の必要性をみとすために形成された、いわば自然発生的な組織であった。

そして1924年、そうした中でマルクス・レーニン主義を奉ずる赤瓊会のメンバーが中心となり関西沖縄県人会が組織の根をおろす。ここで行われた県人会の活動は、職業紹介や宿泊場所の提供など、同郷会組織が行っている活動とほぼ変わらぬものもあった。しかし、もう一方の基盤である紡績会社では、県人会は労災保障交渉などの、より労働組合的な活動を行った。当初はこの労働組合的活動も協調的なものであったが、1926年を境にして急速に変化していく。県人会はこうした活動の中で多くの社会主義者を輩出し、沖縄の社会主義運動の中でも大きな役割を果たしていく。ところが、実質的なリーダー層が共産党に入党し、地下に潜行して姿を消し、また本部でもこうした急進的な動きに批判的な勢力もあり、県人会は1920年代後半に活動を一時停止する。活動を停止した関西沖縄県人会は1931年に再建される。そして県人会は郷友会と居住地区ごとの県人会を主体とした連合体へと再編された。このときに県人会の中心となったのは、赤瓊会のメンバーではなく、既に大阪で一定の地位を得ていた高学歴のエリート層や集住地区のリーダー層であった。

二次的な集住地帯の形成

兵庫県に沖縄出身者が住み着くようになったのは大阪より10年遅れて、1930年代以降である。兵庫県の集住地は、大阪・和歌山・東京・神奈川などで一度定着しその後新たな生活の場を求めて集まってきた人々により形成されたものである。その成り立ちは、幾人かの先駆者が養鶏・養豚などを始めたところに同郷的なネットワークを通じて次から次へと人が集まってきた、というものである。中には100軒近い大所帯となる所もあった。

戦後

戦後、大量の引揚者が流入した兵庫の集住地域では新規流入者への対応に追われた。このような状況のもとで、1945年に関西沖縄人連盟が結成される。結成大会ではまず、「疎開学童、徴用工、挺身隊、引揚民、復員兵士の生活保障を要求すること」が決定された。同年には全国一円で、沖縄人連盟が結成されていく。

1948年の第3回沖縄人連盟全国大会において、名称が「沖縄人連盟」から「沖縄連盟」へと改称される。この会議では大阪代表が圧倒的多数の代議員を送り込んでおり、大阪在住の名士層の意思が反映されることとなった。

このあたりから、大阪の沖縄出身者と兵庫の沖縄出身者の社会的背景の相異が浮き彫りとなり、その後のそれぞれの県人会の組織運営のあり方や、本土復帰における政治的な態度の相異となって現れてくることとなる。

沖縄コミュニティの現在

兵庫は大阪に比べて戦後直後における沖縄出身引揚者の流入の割合が高く、それだけ社会的な混乱も大きかった。また、さきほど述べた集住地域の形成過程の違いもあり、兵庫の沖縄出身者の同郷組織は、大阪に比べてより政治的な色彩を強めることとなった。

大阪沖縄県人連合会の活動が政治的な次元では保守的であり、またむしろ主要な活動が政治的なものよりも親睦的なものであったのに対して、1946年に結成された沖縄人連盟兵庫県本部は沖縄出身者の待遇改善、権利擁護のためにきわめて活発な活動を行ってきた。

しかし沖縄復帰から25年が経過した現在、関西の沖縄県人組織は大きな曲がり角に立っているようだ。現在大阪沖縄県人会に組織されている沖縄出身者の世帯数は、2世も含めた在阪の沖縄出身者の世帯数の10分の1ほどでしかない。また兵庫では、沖縄本土復帰以降、組織が政治的な求心力を低下させている。

このような流れの中で、戦後の高度成長期以降に関西に移住した沖縄出身者は、同郷組織である郷友会には属しつつも、県人会組織には属さないようになってきた。そしてその郷友会の活動の内容についても、会によって異なるものの、多くは年に一度の総会が主たる活動となっている。

かつての同郷団体の重要な活動は互助活動であった。集住地域における同郷人を通じたネットワークにより、居住地や就職のチャンスを得ていた。しかし現在では、互助活動は冠婚葬祭を除けばほとんど行われていない。郷友会は、集住地帯における日常的な対面的接触にもとづいた相互扶助的な組織から、定期的な例会で相互の親交をはかる親睦団体へと変化している。

(山崎公義)

雑誌『沖縄』2011年1月号

年に 78,370 人世帯数が、30,383 戸とされている。そのうち沖縄人の人口は 4 分の 1 と推定されるため、約 2 万人が居住している。なかでも、平尾、小林、北恩加島、北村、南恩加島は、高密度に密集している地域である。現在、大正区では沖縄人の最も多く居住しているところは、平尾 3 丁目で 200 世帯、以下泉尾 7 丁目の 135 世帯、平尾 2 丁目の 130 世帯、小林西 1 丁目の 117 世帯、北村 1 丁目の 108 世帯、同 2 丁目の 92 世帯、北恩加島 1 丁目の 90 世帯と続く（県人会名簿などを集計したデータによる）。これは、かつて沖縄人が集住していた場所から移転して、借換地として大阪市から提供された場所である。

ここでは、大正区を分析する。第 1 に、大正区は歴史的に沖縄からの出稼ぎ労働者を吸引し、多くの沖縄人が居住してきたことによるものである。第 2 に、筆者が、大正区に居住する沖縄人であることから、沖縄人社会の日常生活を経験的に検証できるからである。

本土出稼ぎの背景

戦前に本土へ移動定住してきた一世の人々を第一世代、戦後に本土へやって来た人々を第二世代と呼ぶ。沖縄復帰後にて畏友した人々を第三世代と呼ぶ。

・第一世代

沖縄から本土への集団的な出稼ぎが本格的になるのは、1910 年代以降のことである。第一次世界大戦後、日本資本主義が、急激に膨張したことで、戦後恐慌期が沖縄が強度の窮乏を強いられていたことによる。一方、本土社会は、工業化の過程にあり低賃金で働く労働者を、吸引していった。

・第二世代

沖縄本島に上陸した直後から開始された米軍基地建設によって、軍雇用および軍産業が影響しているため、失業者は少なかった。本土に出稼ぎやって来た人としては、中部の人は少なく、南部の出身者が多い。中部には、米軍基地が集中しているからだ。

・第三世代

1972 年、沖縄は本土に復帰した。軍事基地は縮小され産業構造も転換されると思われたが、実現しなかった。復帰に先立ち米軍が軍雇用者の大量解雇を通告した。沖縄県にとって復帰前後の失業者の増加は、敗戦後の出稼ぎの始まりでもあった。

沖縄の生活世界

・集住地域の形成

大正区は、元來埋立地として造成された所である。江戸時代を通じて新田開発が行われ、市域を造成していった。1923 年には、大阪木材の中心であった長堀市場が、市街地化によって小林に移転し、大正区は材木街としても活発となった。この材木街は、小林木材街と呼ばれ現在の北恩加島、南恩加島、千島、北村、小林、をふくむ総称であった。その中心を開墾工事によって、大正運河が開通し、貯木場となった。沖縄人労働者は、大正区に吸引されてきてこの小林周辺に住むようになった。

・相互扶助

頼りとするのは、兄弟や親類である。お金はあると既払いですんだからこそ路頭に迷わずに住んだ。職の確保や、住居などは、相互扶助関係により達成された。

・職業の変容

『沖縄の労働』

戦前は、職工や単純作業の労働者が中心であった。しかし居残りを決意した人の中には、アパート経営や映画館などの自営業種として生活する人もあった。

・居住地の変遷

大正区は、昔は土地会社の所有するものが大部分を占めていた。広大な土地が材置き場との野っ原であった。土地会社が借家や借地権を保有し、そこに沖縄人たちは集住した。

・集住地域の変遷

当時の沖縄人集住地域には、家屋を建設するには、条件が揃っていた。1、土地が豊富にあった。2、製剤所の廃材、製品が豊富だった。3、沖縄人は、大工仕事の経験が豊富だった。こうして戦後の沖縄人集住地域は拡大していった。

沖縄関係組織

・沖縄県人連合会

現在の主な活動は、会員の親睦と会員の生活福祉援助である。実質的には、親睦団体となっている。

・関西今帰仁村人会

沖縄県北部にある今帰仁村を出身地とする人々で創られる。目的は親睦である。また仕事の情報交換も行われている。

・関西青年の集い「がじゅまるの会」

沖縄出身集団就職者にたいする、本土企業の差別待遇のために作られた。本土に来てみると本土は、異文化との接触であった。また本土人の「まなざし」に絶え切れずに、カルチャーショックに陥った。こうして団結していこうという主旨で結成された。

まとめにかえて

沖縄人二世は、本土社会の沖縄をさけている。大正区の沖縄人社会は、単純労働者の町であった。このように意識された沖縄をさけようとした。しかしさけていたはずの沖縄が、今度は自己の拠り所となる。よりしなやかに、それに価値を見いだしている。沖縄人二世は、自分をなりたさせている根源的な自己の故郷との連続性と一貫性を取り戻し、根のある自分を守り抜こうとしているのである。

(宮脇秀文)

■ 8.

金城宗和 (1992) : エスニック・グループとしての「沖縄人」, 『関西大学大学院「人間科学」no.37, pp.29 ~57

冒頭にこう明記されている。「本稿の目的は、大正区に住む沖縄人を、エスニック・アイデンティティ論から検討し、沖縄人アイデンティティの類型化をこころみ、沖縄人がエスニックグループであるということを明らかにすることにある。」つまり筆者は大正区在住の沖縄系住民達を異邦人とみなし、その所以を学術的手法にのっとり明白にしこの正統化を図るというようである。事実それに相応しく、本編は四つの単位に分割されており、その過程で都度「凹故に凸」の関係を重複して用いこの論を展開している。そ

してこの四つの単位は1, エスニック・アイデンティティ概念の検討, 2, 沖縄人アイデンティティの形成過程, 3, 沖縄人アイデンティティの諸類型, 4, エスニック・グループとしての沖縄人といった具合である。この論理のろ過装置は以上のようなものであるが、この検証の意義はいったいどこにあるのか？ 筆者はその序文に以下のようなくだりを我々に提示している。

「海外十数カ国で生活する移住者や、本土で定着していった沖縄人たちの存在を、むしろ開かれているというイメージでとらえ、日本の国際化への道をひらくプラス要因としてとらえ直し、異質との共存への一助にしたい」

これが筆者の切実な願いであることは言うまでもないであろう。では、本編の内容を可能なかぎり忠実に再現しながらその内容を紹介していく。

エスニック・アイデンティティ概念の検討

藤原 隆雄

この項で筆者はまず、アイデンティティ概念の概説およびその発展の経過に触れている。それをする理由として、我々の念頭には常時自然科学的作法というもののがあらなければならない。つまり筆者は沖縄人＝エスニック・グループの関係を絶対なものとするためここでそのテーゼの綿密な解析に着手しているのである。(一般人にとっては何ともややこしい、拒絶反応を禁じえない類のものであるが。) この概念をうちだした最初の人物は心理学者のフロイトであるが筆者はむしろその後継者ともいえるエリクソンの解釈に注目している。これはフロイト晩年の理論である「超自我」におけるアイデンティティ概念が流動する環境内に置かれた特異な集合に応用するに不適と睨んだためであろう。(エリクソン概念は出自的性向・可視的地位に空間および時間内経過を加味したものが環境に衝突した側面から語られている。) そうして筆者の次の段階としてエスニシティが挙げられる。当然のことながら筆者はこの概念を持ち出すにあってこれを俗にいう(民族性)で割り切ることはしていない。この語の語源にはじまりこの概念の適用される問題、過去にあげられたこの語の解釈などを手短かに持ち出し、そのうえで個人的な見解をささ述べている。で、この成果として綾部恒雄氏の解釈を筆者の操作概念として取り上げている。さて、氏の説である。「国民国家の枠組みのなかで、他の同種の集団との相互行為的状況下に出自と文化的アイデンティティを共有している人々による集団。」つまりここから甲乙の関係下にある異種間人の交わりを体系化し、具体的などころ沖縄人にあてはめようというのである。エリクソン概念が個を語り、綾部エスニシティが集団とその境界線を語る。言うなれば見事に方程式ができあがったわけで、あとは期待する解を待つばかりなのである。

2 沖縄人アイデンティティの形成過程

8 ■

この第二項にあつて筆者は沖縄人、わけでも大正区に移り住んだ沖縄人の歴史的背景について述べている。その中で筆者は沖縄人がほとんど19世紀末頃から本土のみにとどまらず、遠く南米にまで出稼ぎ者の列に混ざって渡航していたことを明らかにしている。数度に及ぶ戦争と本土からの圧搾による困窮が掲載されたデータを通してうかがい知ることができる。筆者はこの一連の過程を可能な限り感情移入を避け、きわめて第三者側の立場に立って語っているものと思われる。結果として、おおむねの概要は現代にまで引き伸ばされ、その縮図を「沖縄」の極小の形である大正区在住の沖縄人に当てはめようという意図にこの項目は帰着する。だが、愚痴をこぼせば「沖縄人」という語句以外に沖縄人が特殊アイデンティティを

獲得した経緯または事実などを明示していないため、つまりは最初から本稿のテーゼに肯定的に依存しているために第一項目で掲げた公式が色あせてしまっていることが挙げられる。

沖縄人アイデンティティの諸類型

「本章の課題は、沖縄人アイデンティティの類型を提示するものである。～」この項で語られている事柄は現代の沖縄人であり（当然大正区における）、現状解析をふまえたうえで筆者はその類型区分に着手している。伝統型、象徴型、消極型、否定ないし無関心型、の四つを取り上げこの線上に沖縄人アイデンティティの振り分けをこころみるのである。この作業の重点に筆者自身は対象者のなかでの「沖縄」のしめている比重を取り上げる。が、二万人ともいう大正区在住沖縄人のすべてに対しこれを適用するのは現実問題不可能であるので、グラフなどのようなものが掲載されていないことをここに書き添えておく。では第四項目の紹介である。

最終項目であるこのくだりはまずエスニシティ概念の再度の説明に始まっている。続いて過去の民俗学者達の沖縄に関する言及を掲載し、それを足場にして現代沖縄人との対話に臨んでいる。これはエスニック・グループとしての沖縄人を確定づける重要な作業でもある。後半部（沖縄人の独自性）がこれにあたる。この対話は年代もまちまちであり、一貫した意見というものがなにも等しいため枠組みにはめるには困難を要することが読者にも感じられる。そしてその程が筆者の最終見解でもある（結び）のなかで筆者自身の言葉によって現実のものとなっている。

成果報告である（結び）を紹介しよう。ここでは作者自身苦々しい思いであったろう。というのは結局のところテーゼが満たされなかったのである。明確な是非が流動する人間の意識のため濁されているのである。「沖縄人をエスニック・グループと規定して論じてきたが、そのアイデンティティがエスニック・アイデンティティであるということ、完全に実証するまでにはいたっていない。」これが筆者の判断である。そして同様私もその意見に賛成した。とにかく活動する人間を科学するのは非常に難しい。

今後の発展に期待する、である。

出き田代百四郎の「沖縄」の書評（花房修吾）

花房修吾の「沖縄」の書評は、沖縄人のアイデンティティをめぐって、おもしろい議論を展開している。沖縄人のアイデンティティをめぐって、おもしろい議論を展開している。

■ 9.

朝日新聞 1968(昭和43年)7月15日(朝刊第7面) 大阪府の沖縄人アイデンティティをめぐって、おもしろい議論を展開している。

大阪市の南西部、大正区の片隅に“沖縄スラム”とよばれる一角がある。大正区小林町。大阪湾にそそぐ尻無川口にあるこの一帯は、もともと、貯木場と製材所の多い材木の町であった。それが、戦災と昭和二十五年秋のジェーン台風で壊滅した。大手の製材所や材木商は、となりの住吉区へ移った。市の区画整理事業で造成されたままの空地が、そこに残り、ゴミがつもり、草がのびて荒れ放題。再開発が進められている大阪の中で、忘れられている地域である。ジメジメした湿地帯の上にひしめくバラック。そこに約

千五百人の人が肩を寄せ合って生きている。そのうち約三割が沖縄出身者だ。

表通りから、一歩路地へ踏み込むとバラックの密集地帯だ。長さ約四百メートル、幅百メートル前後の細長い土地に四百世帯が住み、廃材を打ち合わせただけの軒先をぬって迷路で入り組んでいる。バラックの床下をドブが流れ、あふれた水は家の土間へ流れ込む。ちょっと雨がふれば地区全体がドロにぬかるみ、一向に乾かない。床上浸水は年に二、三回は必ず起きる。そして町をおおう下水とゴミの腐った匂い。ほとんどの家は一間だけ。炊事場があるのはいい方だ。自分の家に水道の蛇口があるのは、全世帯のやつと半分。便所さえも共用のところが多い。火事になったら致命的である。地元の消防署も「火を消すことは不可能。人命救助だけを考えているが・・・」と診断する。

秀さん（四十八歳）は、地区のはずれにある本建築の二階家に住んでいる。今では地区の役員もして、住民たちの信頼も厚い。だが暮らし向きが落ちついたのはここ数年のことだという。二十八年に勤めていた会社が倒産。知人を頼ってここへ住みついた。秀さん一家の支えになったのは、同郷の人たちの暖かい心だった。その日の米がなければ借りられる。営業資金もみんなが融通しあってきた。「スラム、スラムいうてもろたら迷惑だっせ。ポロ家に住んでいても、みんなちゃんと、まじめに生きとるんや」と言う。

大藪寿一大阪市立大学文学部助教授（社会学）の調査結果によると、職業は運転手、工員、雑役などが全体の五三％で、しかも給料を月給で受け取っているのはわずか二八％。家族全員の収入をあわせても月四万円以下しかないのが五八％を占めている。しかし全体の九割ちかくが、月に二十日以上働いており、まじめな生活態度がうかがわれる。

この地区は暮らしやすい、と住民は口をそろえる。身なりに構わなくてもいい。ものが安い。助けあえる— その理由はたくさんある。なかでも最大のもは敷金なしで、ともかく住めることだという。ここに「永住したい」人たちは沖縄出身者のうち五七％もいる。「なぜ沖縄の人間が集まってくるのか。あとからあとから流れ込んでくるものが跡をたたんのか。スラム対策やの、どうのという前に、市のえらいさんはよう考えてほしいですなあ。」秀さんのことばの中には行政への不信がありありとうかがえた。

根本に本土との格差・見通しも立たない改善策

大阪市民生局も、この地区にいままで何の対策も打ち出してこなかった事実は率直に認める。大藪助教授に、市内六ヶ所の調査費として四十一年度予算で百万円を出しただけである。

市がいま検討している対策は、区画整理事業。バラックを取り壊し、新しい換地に不良住宅改良法の適用を受け、鉄筋アパートを建てて住民を移すことだ。その区画整理事業も、十七年かかってやつと六割まで進んだところ。いちばんやっかいな小林地区は最後に手をつける、という。だから、いつになったらこの地区の人が大水と火事の心配なしに暮らせるようになるのか見当もつかない。市の幹部に言わせると「沖縄の人が多くても、市としては同じ市民というあつかいだ。特別の施策が必要だというのなら、出稼ぎ労働者対策など国の責任でやるべきだ。」ということになる。

しかし大藪教授は「小林地区は、日本の中に持ちこまれた沖縄そのものなのだ。」とも言う。沖縄を出た人達がこの地区にたどりつくまでの経過を見ると、戦前から本土に住んでいた人たちのところへ、三十一年以降新しい渡航者が集まってきている。西日本各地へいったん散らばった人たちが、次第に大阪へ集まり最後に小林地区にやって来る。学歴は義務教育以下が八割以上を占め、同じ小林地区の“本土”出身者よりずっと低い水準にある。大藪教授は「小林地区は三十一年以降の高度成長政策期以後にふくれ上

がってきた新しい型のスラムだ。ただ住民は精出して働けば楽になれると信じており、流れものや犯罪者もはいろいろこんでいない。他の都市スラムのように道徳的荒廃まで進んでいない。住民は差別されているとは思っていないが、スラムに流れこむこと自体が構造的な差別を受けていることを物語っている」と言う。

沖縄出身の評論家新里金福さんは、その原因として本土と沖縄の行政の差別の歴史を指摘する。「いま、基本的人権や社会保障、教育の面で本土との一体化が強く叫ばれているが、裏がえせばそれだけ行政に差があるということだ」と新里さんはいう。「本土が沖縄に要求しているのは、国内の人手不足で穴のあいた底辺の職場を、沖縄出身者で埋め合わせることだろう。私の見た京浜地区のスラムも忘れられたまま放置されている」と手きびしい。

今年の春、高校・中学の新卒業生二千百人が希望に胸ふくらませて本土へやってきた。去年一年間に縁故を頼ってきた人も含め、沖縄からの就職者は八千人を超すだろうと琉球政府東京事務所はみる。祖国復帰が実現すれば、さっそく五、六万人が本土へやって来るだろうとも言われる。ほとんどは中高年層の不熟練労働者たちだ。小林地区をはじめ、各地の「沖縄スラム」をこのままの状態に放置しておく限り、日本の中の沖縄はその祖国を取り戻したことはない。

(山田理絵子)

■ 10.

枝川公一(1994): 大阪の中の「沖縄」は都市の大波に浮く「救命ボート」のごとく、「潮」vol.423, p362 ~373

人口の四分の一が沖縄出身者だという大正区をあるいて見えてきた大阪文化の柔軟性

沖縄出身のオバアと青年の「物語」

金城馨氏は製本会社に勤務する傍ら、沖縄に関する文献資料の収集に情熱を燃やす「関西沖縄文庫」の主宰者である。関西沖縄文庫は氏の自宅を利用してつくられ、20畳ほどのただ広い部屋の左右に本棚が並んでいる。金城氏がオバアに会ったのは20年あまり前である。オバアは大正区に当時あったクブングワは琉球語で窪地を意味する。市の住宅改良事業の盛り土事業から取り残され、そこだけが窪んでしまったからである。

金城氏は「沖縄人」二世である若いころ、「沖縄」から逃げようとしていたころにオバアと出会った。沖縄人であることを少しもものおじず、貧しいかもしれないけれど誇り高く、明るく、堂々と生きるオバアに出会い、頭を殴られた感じがしたという。以来金城氏にとってオバアは切っても切れない親みtainな存在、沖縄を教えてくれる「先生」になったという。

大正区の四人に一人が沖縄出身者

在日韓国・朝鮮人や「沖縄人」の住む町を撮る写真家、太田順一氏は「韓国・朝鮮や沖縄にルーツを持つ人々の存在、その個性が大阪文化をかたちづくるのに寄与している。ほくは、大阪人が持っている柔らかさは、多分に沖縄の人たちからきていると思えてならない。」と言う。

これらマイノリティーが特に集まる居住地域がある。「在日」は東部の生野区に多く、沖縄の人たちが目立つのが大正区である。筆者は西成区を歩いていて、排気ガスの充満にたまらずバスに乗ったことがある。螺旋状の橋を上り下って大正区に入ったが、中空に投げ上げられたような橋の上から見た風景には目を見張った。いくつもの煙突と、無愛想な屋根を連ねた工場、川の上を行き来する小船、そこに灰色のスプレー・ペイントを撒き散らしてもしたみたいなのモノトーン。アメリカ映画が、今世紀はじめの「工業都市」を描くと、セピアがかった画面のなかにこういうイメージがよく登場する。日本ばなれした雄大さである。裏道に入ると軒先に獅子の形の置物が二つづつ置かれている家がいくつもある。この置物は、シーサーという沖縄独特の守護神である。表札をたどると、金城、宮城、鳥袋とし、つた沖縄によくある姓に出会う。そこは空気が違っていた。人と人とが親密に交錯する大阪の街とは異なり、スカッと抜けていてとらえどころがない。道行く人の動作は緩慢で、のびやかである。夕暮れ時になると、西に、オレンジ色が滲み出したみたいな巨大な夕陽がたちはだかり、東の突き当たりには、工場の建物が視界を眼っている。これを見た瞬間、ここは異文化の街なのだ、という思いにとらえられた。

大阪に「異邦人」のコミュニティが形成されはじめてからすでに半世紀以上がたつ。大阪にこれらの人々が流入し始めたのは、大正時代後期から昭和の初めにかけてである。工場とその周辺で必要とされる労働力として、国内でもっとも貧しい地域である、植民地統治下の朝鮮半島と沖縄から労働者が際限なく運び込まれた。

差別された原体験から沖縄の本に没頭

金城氏の父親は初期のころに出稼ぎにきた沖縄人の子ともで、大阪に生まれた。紡績女工として沖縄から来ていた母親と知り合い結婚。戦後すぐ沖縄に帰るが、金城氏が幼いころに一家は再び本土にやって来た。父親の「ナイチャンにマキビイ(内地人に負けたくない)」という言葉聞いて育った金城氏は、沖縄というものに自信がもてなかった。小学校ではバカにされ、中学校で教師から「沖縄は日本か?」と尋ねられても答えられなかった。そして自らのアイデンティティーを求めて沖縄について書いた本を読み漁るようになる。

都市の大波から守る救命ボート

昭和47年に沖縄の本土復帰が実現する。このころやってきた沖縄の若者達の前にも差別と不理解はたちはだかり、自殺や犯罪が頻発した。この問題をなんとかしようと、金城氏ら「二世」と沖縄から出てきて間もない「一世」らが出会い「関西沖縄青年の集い」、通称「がじゅまるの会」が結成された。この会ではそれまで上の世代からはタブーとされてきた沖縄を表現することを行い、区内の公園ではじめて沖縄の盆踊りにあたるエイサーの大会をはじめた。

金城氏がオバアと出会ったのも、ちょうど一世らと交わるようになったころである。金城氏は9年前、自宅の一階を開放して、高校生の頃から集めてきた本を揃え「文庫」を開いた。ここで本を読んでも、三線(蛇皮の三味線)の練習をしても、酒を飲んでもいい。不安に苛まれ、逃亡をしきりに考えた若い頃にめぐりあった人々によって、金城氏は自信と希望を得ることができた。その経験が、この広々とした板の間の空間を生んでいるのであろう。そこは、都市の大波から守られる救命ボートみたいである。おぼれて沈んでいくにまかされることはない。危うげではあるけれど、逆に言えば、色とりどりのボートが散らばって

いることが、都市の強さの証明ではないか。『アノゲコ由野式の養殖田。武さふら科欣宇田飯木四孝さ
りてアノゲコ由野式の養殖田がアノ野を遊覧するの歴史』

コリアボランティア協会の豊かな空間

「在日」の「二世」康秀峰(カンスボン)氏は猪飼野にある「コリアボランティア協会」の主宰者である。「在日が痛い目におうてっていうことばかり考えてたらだめだと思った。もっといたい目におうてる人もいるんやから。その人らとともに進まないといけない。(中略)やられてるもんがやられてる人みてこそ、感動がある」。24時間体制である。話している間にも様々な人たちが出入りする。この生野区は障害のある人と、お年寄りの住民が多く、ハンディキャップに対して地域が寛大なためにわざ引越してくる人もいると言われている。そこに浮かんだ、これもまた救命ボートである。

「お墓とか済州島にあるからね」。康氏は自らのアイデンティティーについてはっきり言う。順応はするが同化はしない。この姿勢こそ都市を豊かにする。

大阪に移植された沖縄文化の数々

金城氏のところには、エイサーに参加するようになった高校生が訪ねてくる。大阪ではただ一人の三線製作者である大湾政一氏のところにも、最近には沖縄と縁の無い若いひとが訪ねてきて、つくってほしいと頼む。大阪は、数十年の差別の歴史を抱え込んでいるが、それをプラスのエネルギーに変える機縁もまた豊富にある。沖縄空手「剛柔館」の館長、福元英吉氏の弟子も「ヤマト」の人の方が多くなっている。琉球舞踊の渡嘉敷流師範である宮城千代子さんも稽古場をつくり、30人あまりの弟子に教えている。

東京にはない度量の大きさ

「第二の沖縄」に暮らす人々と相対して思うのは、大阪は、人が自分の生まれ育った土地の生活と文化に依拠しつづけることを許容する度量を持った都市だということである。これは、差別の歴史に目をつぶった見方だと批判されるかもしれないが、その歴史があるからこそ、この「度量」が生まれているとも言える。東京にはそれが無い。ところで、「オバア」にはついに会うことがなかった。にもかかわらず親愛に似た感情を抱く。これも、この老女のことを語る人物を介して沖縄が身近にせまってくるからであろう。その意味で、大阪のマイノリティーは生々しい。

(山田理絵子)

■ 11.

服部良一(1999): 30年ぶりのクブングアー, 「差別とたたかう文化」vol.12, pp.29~31

『クブングアー』とは沖縄の言葉で『窪地』という意味だそうだが、その言葉の通りに低い土地に約千世帯がひしめき合って生活していたという。どれほどの人が沖縄出身者であったのかは分からないが大阪市民生局が大阪市内のスラム実態調査(1966~1967年)を大阪市大に委託したものがあるがそれによれば、30.3%が沖縄出身とある。住宅の調査結果を見ると仮小屋式バラック(14.1%)、長屋方式の連続バラック(41%)とバラック建てが半分以上を占め、それ以外にも老朽長屋(23.3%)、戸建老朽家屋(18.5%)

